コラム

土木業界にも欲しい積極的な＜承繼放光的傳統（輝く伝統受け継いで）＞

ＮＰＯ法人　あそ地下足袋倶楽部　　理事長　木村　達夫

以前、我が国の「精密機械立県」を自負する、信州・長野の各会社が「時計修理の技能五輪大会」を開催しているのを、ＮＨＫ・Ｅテレでみた。

会社と自らの、栄誉と名誉をかけて大会に出場する若手技術者を、嫌な顔一つせず先輩技術者が、終業後も遅くまで懇切丁寧に、技術指導や助言をし、また、それにこたえて若手も必死に、技術の習得に励んでいた。これひとえに、日本の精密機械業界の＜承繼放光的傳統＞ということではないか。

大会ではその成果をいかんなく発揮し、優勝の栄誉に輝いた彼等の首にかけられたその「金メダル」、実に誇らしげに、光輝いているように、また、「金メダル」を首に掛けてロビーに出てくる彼等には、先に優勝の表彰式などをロビーのテレビで見て知っていた先輩に「金メダル」の御礼の報告、また、これからの精進を誓い、双方ともに「金メダル」の余韻に浸り、涙で顔をクシャクシャにし、手を取り合い歓喜にくれていた。

小生、今の時代、時計の修理？なんか・・・、買った方が安くて良いのにと・・・思いつつ見ていた。しかしこの、精密機械業界各社そろって、「大事なのは基礎・基礎的な技術の習得」ということを理念におき、それが無ければ技術は一歩も前進せず、また、当然新しい技術も開発されることはないことを、「時計修理の技能五輪大会」で、＜承繼放光的傳統＞ことの大事さを思い知らされた。職場にそういう指導・助言をできる技術者が１人でもいれば、将来２人になり３人になり・・・技術の習得・継承はされていき、企業全体の技術の向上（スキルアップ）にもなるのではないか。

また、今回は小差で＜一敗塗地＞、金メダルを惜しくも逸した、他社の若手技術者諸君等は来年の大会は、絶対に俺の会社が俺の手で栄冠をいただくと、燃え上がる闘志を心に秘め挑戦していくことを誓っていた。そういう基礎・基礎的な技術の習得・継承が、各社切磋琢磨してなされていけば、永々と日本の精密機械業界は発展の一途を辿るのではないか。

そこで、有史以来、規模の大小、美醜、良悪等々はあれ、ライフラインを守ってきたこの＜土木＞。その長い＜土木＞の歴史の中の一部に僅か今、顔を出させてもらっている我々は、＜土木＞の先人・先輩からの＜承繼方光的傳統＞はどうなっているのといえば、思い出しても吐き気がする、「コンクリートから人へ」の、薄恍けた言葉を操り、全国民をその気にさせ、また、それ以前から燻っていた、税金無駄使いに端を発した談合問題等々で＜土木＝悪＞という「マスメディア」を上手く使った「大バッシング」を展開されては、特に足腰の弱い、地方の＜土木＞業界は、疲弊の一途を辿らざるを得なく、おまけに３Ｋ・５Ｋが若手の入職の前に立ちはだかり、まだまだいける年金組の大ベテランの引退に拍車をかけ、そんなこともあり当然この業界の「人手不足」は深刻そのもので、全国民の見ている中でこっそりと仕事をして時の過ぎ行く中、＜土木＞の＜承繼方光的傳統＞などと言っている時ではなかったように見えてならない。

我が国、日本が最近遭遇している自然的大災害、３.１１の大災害の地震による津波・原発問題また、高速道トンネルの天井崩落、各地でおこる記録的豪雨出水による堤防破堤、広島土砂災害、御嶽山の水蒸気噴火等で、多数の尊い人命を失わざるを得なかった、日本の＜土木＞は、財政問題など諸々言い訳など言えばキリが無いが完全に大自然災害から「ノック・アウト」を喫した状態だ。また、これから近いうちに起きるといわれる、首都直下・南海・東南海地震、それに老朽化著しい各インフラの補強・補修等も早急に手当てをしなければ再度「ノック・アウト」されるに違いない。

日本の＜土木＞技術は世界一と自負している小生は、泣いてばかりいる地方の建設業界も若手技術者に基礎・基本的技術を徹底的に叩き込んで育成してもらいたい。その役を担うのが、今まで刻苦勉励にして培った「明確な戦略、組織作りと決断」を、たまには粋に、一顧する余裕を持ち、ニコポン精神でこれからの日本の＜土木＞を美風にささえる、若い技術者を指導していくのが「ＣＮＣＰ」の役目だと思っています。